



Title	書簡と扇のデジタルアーカイブ : 大阪大学懐徳堂文庫の取り組み
Author(s)	湯浅, 邦弘
Citation	懐徳堂研究. 2014, 5, p. 3-11
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/50995
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

書簡と扇のデジタルアーカイブ

―― 大阪大学懷徳堂文庫の取り組み ――

湯 浅 邦 弘

江戸時代の学問所「懷徳堂」に由来する約五万点の貴重資料が、現在、大阪大学に「懷徳堂文庫」として収蔵されている^①。大阪大学では、大学創立七十周年にあたる二〇〇一年から、この懷徳堂文庫のデジタルアーカイブに取り組んでいる。年々、その成果は蓄積され、「WEB懷徳堂 <http://kaitokudo.jp/>」での公開を進めている。このサイトを制作する際、最も工夫したのは、多様な資料への対応である。文献については、比較的容易にデジタルアーカイブが可能であるが、その他の資料については、その形状や特質に留意した対応が必要となる。本稿では、その中から、従来デジタルアーカイブには馴染まないとされてきた書簡（書状）と扇（扇子）について、大阪大学の取り組みを紹介したい。

一、書簡

書簡（手書きの書状）は、古文書読解の中でも最難関の資料であるとされる。それは、当事者同士でしか分からない情報が記されており、しかも、かなりの崩し字が使用される場合があるからである。

懷徳堂記念会の創設（一九一〇年）に尽力した西村天因（一八六五―一九二四）の書簡二十七通が、近年、懷徳堂歴代学主の菩提寺である誓願寺（大阪市中央区）で発見された。このコンテンツでは、その中から、明治時代末期の懷徳堂記念会創設の経緯を記した重要書簡を取り上げ、その画像、翻刻、注釈、解説を提示した。

なお、懷徳堂記念会とは、江戸時代の懷徳堂（一七二四年創立―一八六九年閉校）の顕彰と復興を目的とした

財団法人で、明治四十三年（一九一〇）、大阪の政財界の協力により設立された。

また、西村天囚とは、重建懷徳堂の理事兼講師。名は時彦、字は子駿、号は天囚・碩園。鹿兒島種子島出身。明治十六年（一八八三）、東京帝国大学古典講習科に入学。中退の後、大阪朝日新聞社に入り、懷徳堂記念会の創設に尽力し、大阪朝日新聞に「懷徳堂研究」を連載して、その顕彰に努めた。その連載をまとめた『懷徳堂考』は、今日においても、懷徳堂研究の最も基本的な文献としての価値を持つ。

西村天囚は、大正五年（一九一六）の懷徳堂の復興後は、懷徳堂理事・講師を務めた。主著に『日本宋学史』がある。また、晩年には『楚辞』『尚書』の研究と資料収集に努め、天囚の書齋は『楚辞』『尚書』の研究と資料と名づけられた。現在、大阪大学懷徳堂文庫漢籍の内でも『楚辞』関係資料は、「楚辞百種」と総称され、重要なコレクションの一つとなっている。

二〇一三年四月、大阪大学懷徳堂研究センターは、この天囚の書簡を、デジタルコンテンツ「西村天囚書簡」として公開した。http://kaitokudo.jp/tensyu/tensyu_top.html

まず、トップページ（図1）には、全二十七通の書簡



図1 「西村天囚書簡」トップページ

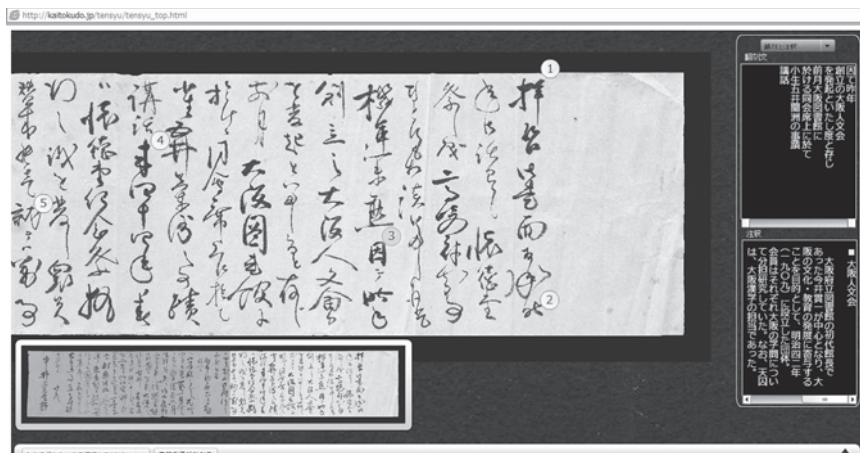


図2 各書簡の画像と翻刻・注釈

のアイコンと、発信者である西村天四、受信者である中井木菟麻呂の肖像画を配置した。書簡の全体的な解説と、西村天四・中井木菟麻呂の人物紹介については、それぞれ青いアイコンをクリックすると閲覧できるようになっている。

次に、各書簡は、そのアイコンをクリックすると画像が掲示される(図2)。書簡の画像は、上に「部分」、下に「全体」が示される。部分画像には、文番号が付されている。崩し字で書かれた書簡は判読が大変難しいので、この文番号をクリックすると、それに対応する翻刻文と注釈が画面右側の上段と下段に掲示される。閲覧者は、この文番号をクリックしながら、書簡を読み進めることができるのである。画像は、マウスのドラッグによって移動させることができ、現在閲覧している位置が、下の全体画像に示される。

江戸時代や明治時代の書簡を紹介した本は数多くあるが、それらは書簡の写真を紹介するだけのものが多い。また、写真に添えて、翻刻を提示する場合でも、崩し字が読めない読者には、写真のどの部分と翻刻のどの部分が対応しているのか、判別するのは非常に困難である。

また、紙媒体で公開すると一方通行の情報提供に終わってしまうが、このコンテンツの公開により、閲覧者

から、翻刻・注釈などに関する新たな情報が得られるようになった。今から百年前の懷徳堂記念会設立時の状況が分かり、かつ、閲覧者から新情報を得られる貴重なコンテンツである。

二、扇

日本の伝統文化の一つである扇（扇子）をどのように理解してもらうかも、重要な問題である。江戸時代の懷徳堂の学者・中井履軒（一七三二～一八一七）が制作した「聖賢扇」という資料がある。二百年以上前の資料なので、これまで、この扇を折りたたんだり広げたりすることには大いに躊躇いがあった。そこで、デジタルコンテンツ「聖賢扇」を制作し、インターネットで公開することにした。<http://kaitokudo.jp/ougi/index.html> (図3)

この扇は、扇面の表に歴代の聖賢や学者の名を朱筆し、裏面には「醸評」と題して、これらの人々を酒にたとえて評を加えたものである。表と裏を対照してみても初めてその面白さが分かる。このコンテンツでは簡単なマウス操作で、扇の表と裏を対照できるように工夫した。日本の扇文化が視覚的に分かるとともに、そこに込められた儒教尊重の念をうかがうことができる。

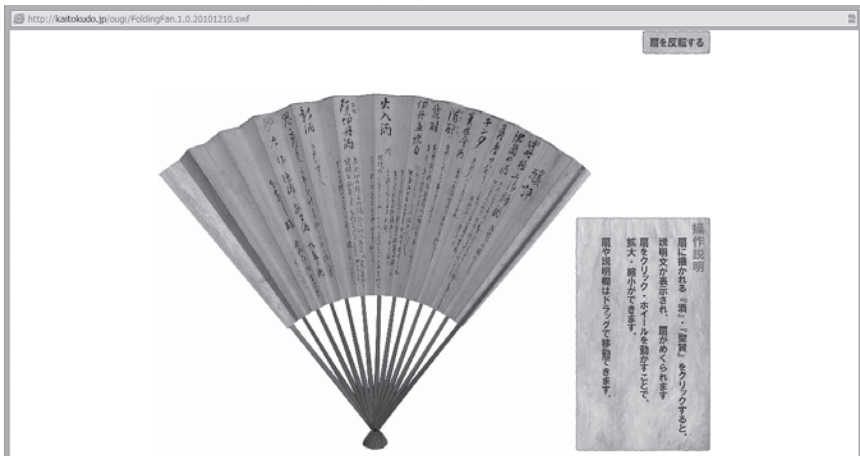


図3 デジタルコンテンツ「聖賢扇」

この扇の外尺寸法は、上弦長五四・五cm、幅一六・四cm。原本は失われて存しないが、文政三年（一八二〇）に履軒の子・柚園が写したものが残されており、その扇面の記載は、懷徳堂記念会刊行の『懷徳』十七号付録の吉田鋭雄「懷徳堂水哉館遺書遺物目録」に翻刻されている。

以下、履軒の評を、表面・裏面を対照させて各々記す。なお、「」内は裏面の「醸評」の細書。（ ）は筆者（湯浅）の注記。漢字を現行字体にし、送りがないを加えるなど、表現の一部を改めた。

- ・ 孔孟（孔子と孟子）……伊丹極上御膳酒「賞賛に詞なし」
- ・ 漢以来の俗学……諸国の酒「上酒もあり粗酒もあり、処により時によりて様々差別あり、但よきというには限りあり、あしきは限りなし」
- ・ 老荘……薩摩あわもり「たまたまに一盞の賞玩、但酒宴に出されぬ」
- ・ 釈（仏教）……チンタ「夷狄人はうまがるげな」
- ・ 道家……薬保命酒「名目は結構なれど取りあぐる人なし」
- ・ 神道……濁醪（どぶろく）「古代はこれにて事すみ

たるか」

- ・ 禪……焼酎「暑中或いは積気おさえに一杯はよき事もあるべし。畢竟は毒と心得たるがよからん」
- ・ 程朱（北宋の程明道・程伊川と南宋の朱熹）……伊丹並諸白「どちらからみても江戸づみづみ、但並酒の古道具を用いて造られたる故、すこしのうつり臭（か）あり。又実（み）が漓（うす）うて足がよい。ここが御膳酒におよばぬ所」
- ・ 明諸儒（明代の儒者）……火入酒「損じたる酒をなおすが手段。但酔き味はなおりたるようなれど灰の気が鼻をつく。さらは酒はなおりたるやあらずや」
- ・ 陽明（明の王陽明）……賈伊丹酒「急度伊丹極上御膳酒と印はあれど、実は並酒に焼酎を合わせたものと見えたり。やはりビイドロの猪口にてまいるべし。聞してはいけまい」
- ・ 仁斎（伊藤仁斎）……新酒「下戸がすく」
- ・ 徂徠春台（荻生徂徠と太宰春台）……鬼ころし「あらか計にて酒ともおもほらず」

このように、本資料では、孔子孟子の正統儒学が「伊丹極上御膳酒」として絶讃される。ちなみに、「伊丹」とは現在の兵庫県の名で、当時から名酒の生産地とし

て有名である。一方、漢代以降の儒者、宋代・明代の儒者については徐々に評価が厳しくなり、また、儒家以外の老荘や仏教、神道、禪宗などには手厳しい評価が下され、さらに、荻生徂徠と太宰春台は酷評されている。諸学に対する履軒の評価、特に荻生徂徠の立場を明快に示す資料であると言えよう。

しかし従来は、この扇の文言を直接確認することはかなり困難であった。展覧会で展示する場合にも、どちらか一面だけしか掲示できなかったのである。仮に、この扇を立方体のガラスケース内に立てて展示すれば、両面を閲覧できるわけであるが、そうすると、扇を細いワイヤーで固定しなければならず、資料を傷つける恐れがある。

そこで、このデジタルコンテンツ「聖賢扇」では、表面・裏面どちらも表示でき、また、マウスクリック一回で、簡単に反転表示させることができるように工夫した。画像の拡大も可能である。

しかも、表面と裏面の文言がどのように対応しているのか分かりやすく表示できる。例えば、「醸評」の「伊丹極上御膳酒〔賞賛に詞なし〕」にマウスを当てると、その釈文が表示され、クリックすると、反対面の「孔孟」が赤色表示される。つまり、これによって、孔子と孟子

とが最高級の吟醸酒として評価されていることが容易に分かるのである。

同様に、「陽明」をクリックすると、反対面の「醸評」の「贗（ニセ）伊丹酒」が赤色表示される。つまり、陽明学は、孔孟の学に似てはいるけれども「贗物」だとするのである。江戸時代における学問評価の一端を示す資料として興味深い。このコンテンツは、こうした資料の特色を視覚的に分かりやすく表示できるのである。

なお、中井履軒が、こうした批評を扇に記したのはなぜであろうか。筆者は以下のように推測する。扇は、折りたたむと一本の棒のようになり、展開すると扇状に開く。こうした扇の特性を重視すれば、諸学派が追究すべき道は本来一つであるが、それぞれに理論を展開していくと、大きな違いが生じてくる、ということを示唆しているのではなからうか。

また、この扇が「聖賢扇」と称されるのは、履軒自身の命名か後人の命名なのか、実のところ不明である。しかしいづれにしても、聖人が清酒、賢人が濁り酒に喩えられることから、聖賢と酒は密接な関係にあり、この醸評を記した扇が「聖賢扇」と呼ばれるのは、二重の意味で興味深い。

三、WEB 懷徳堂の展開

以上、懷徳堂デジタルアーカイブの内、「西村天因書簡」と「聖賢扇」について紹介してきたが、これらを集約する「WEB 懷徳堂」<http://kaitokudo.jp/> では、他にも様々なコンテンツを公開している。

漢籍を電子書籍として公開しているのはもちろん、多様な器物のデジタルコンテンツ化にも積極的に取り組んでいる。中には、印章や版木、医学書や本草書、屏風や模型など、日本のデジタルアーカイブでは他に見られないものもある。具体的には次の通りである。

- (1)「懷徳堂文庫電子図書目録」……『懷徳堂文庫図書目録』の全ページ約三万六千点の資料を検索できる。また(2)のデータベースにリンクしている。
- (2)「懷徳堂貴重資料データベース」……懷徳堂文庫資料の内、最重要資料約四百点を検索することができる。高精細な画像、詳細な解題が付されている。
- (3)「懷徳堂印章展示」……懷徳堂文庫に残されている二百を越える印章をデジタルアーカイブ化したもの。3D画像により、印をマウス操作で回転させ、

あらゆる角度から確認することができる。また、中井竹山・中井履軒の印については、そのすべてを印譜『懷徳堂印存』と対照しながら閲覧できる。

- (4)「懷徳堂絵図屏風展示」……懷徳堂文庫に残されている巨大な屏風をデジタルアーカイブ化したものの。一双十二面からなる屏風に貼り付けられた歴代の懷徳堂学舎の様子を閲覧することができる。

- (5)「左九羅帖」……中井履軒の著した動植物図鑑(本草書『左九羅帖』)の全ページをデジタルブックとして公開するもの。簡単なマウス操作により、実際に本をめくるようにして、全ページを閲覧できる。

- (6)「懷徳堂四書」……懷徳堂を代表する四書注釈の内、中井履軒の『大学雜議』『中庸逢原』『論語逢原』『孟子逢原』を取り上げて、その全容を紹介するもの。『大学雜議』と『中庸逢原』については、朱子の「章句集注」との違いを視覚的に明らかにする「対照ツール」を付けている。

- (7)「天図シミュレーション」……中井履軒が作成した木製の天体模型「天図」を動かしてみる(シミュレーションできる)もの。これにより、履軒の天体観が、天動説と地動説を折衷したような、修正天動説の立場にあったことがよく理解できる。

(8)「越俎弄筆」……中井履軒の医学書をデジタルブックとして公開したもの。単に全ページを閲覧できるだけではなく、重要な語句、印記などには、閲覧者のマウスクリックを促す赤枠を付け、それをクリックすると辞書画面が開いて、読解を支援するように工夫されている。

(9)「懷徳堂文庫蔵版本『画本大阪新繁昌詩』」……懷徳堂文庫に残されている約三百枚の版本の中から、最も保存状態の良い『画本大阪新繁昌詩』をデジタル化したもの。木版印刷の時代の原版であり、また、著作権の保有を意味していた版本は、世界にも、そう多くは現存していない。このコンテンツでは、版本と版本を対照させ、その版本が実際に懷徳堂の版本で刷られたものであるかどうかを検証することもできる。

世界には、「〇〇文庫」と称するコレクションがあるが、その多くは書籍である。しかし、懷徳堂文庫は、書籍を中心に多くの器物を含んでいる。具体的には、書籍約九千三百点(五万三千五百冊)、内、漢籍約六千三百点、和書約三千点。器物約六百点といった状況である。さらに現在も、大阪大学の購入や関係者の寄贈により、点数

がわずかながら増加している点にも特色がある。言わば、生きている文庫なのである。

こうした特色ある文庫をより有効に活用し、また公開するために、デジタルアーカイブの手法は極めて重要である。その手法は、大阪大学懷徳堂文庫だけに限定されるものではなく、多くの図書館・博物館におけるデジタルアーカイブ、および電子出版などにも応用が可能である。懷徳堂の手法が一つの手がかりとなり、世界のデジタルアーカイブが進展することを大いに期待したい。

なお、これらの資料は、いずれも大阪大学附属図書館貴重図書室に保管されており、制作したコンテンツは、「WEB懷徳堂」において無料で公開している。課金による収入を得ることよりも、懷徳堂の貴重資料をできるだけ多くの方々に見ていただくことを重視しているからである。

注

(1) 懷徳堂の基礎的な情報については、『懷徳堂事典』(湯浅邦弘編著、大阪大学出版会、二〇〇一年)、及び『懷徳堂研究』(湯浅邦弘編著、汲古書院、二〇〇七年) 参照。

(2) 「聖賢」とは、もとより聖人と賢人との併称であるが、その他、聖人が清酒、賢人が濁り酒に喩えられ、また広く酒の意味で

使われることもある。そうした用例としては、唐・白居易「和夢游春詩一百韵」に「九醞備聖賢、八珍究水陸」、宋・蘇轍「九日陰雨不止病中把酒示諸子」詩之三に「庭菊兼黃白、村醪雜聖賢」などがある。

【附記】 本稿は、二〇一三年七月十一日、中国甘肅省敦煌で開催された「2013年中文デジタルパブリッシング・デジタルアーカイブ国際学会（中文数字出版与数字図書館国際研討会）」において口頭発表した「書簡与扇的数字图书馆——大阪大学怀德堂文库的相关措施——」（原文は中国語）を基に、修訂を加えて定稿としたものである。なお、本発表により、筆者は当学会から「優秀学術論文賞」を授与された。